

南スラウエシ(セレベス)のイスラム改革運動研究(その1)

—ムハマディヤ・マカッサル支部設立に関する覚え書—

利 光 正 文

はじめに

スマトラ、西ジャワ、スラウエシ(旧セレベス)は、インドネシアの中ではイスラムの強い地域として有名である。北スマトラのアチエ戦争、西スマトラのパドリ戦争は、オランダの侵略に対するムスリムの抵抗運動であったし、西ジャワや南スラウエシで展開されたダルル・イスラム(イスラム国家)運動は、インドネシア共和国に対する反政府運動となつたことは記憶に新しい。インドネシアの他の地域の人からみても、これらの地方のムスリムの行動はファナティック(狂信的)にうつるようである。三五〇年にわたるオランダのインドネシア植民地支配の歴史を見た場合、ジャワ以外(外領)の島々に完全な支配権を及ぼしうようになったのは二〇世紀初頭のことであり、それ以前はイスラム王国がそれぞれので栄えていた。オランダに征服されたとはいえ、西ジャワのイスラム王国バンテンも強力であった。

さて、本稿で取り扱う南スラウエシは、海賊として名をはせた海洋民ブギス・マカッサル族の社会である。イスラム侵入以前のブギス・マカッサル社会はパン・ガデレン(神聖なる慣習・規範)により規定されており、たとえばデワタ・セウワ・エ(唯一の神)と呼ばれるような唯一神への信仰が行なわれていたといわれる⁽¹⁾。したがってイスラムが伝来した時その受け入れもスムーズであった。イスラムは一七世紀初めに南スラウエシに入ってきたが、従来の慣習法とイスラム法

とがうまく適合し、イスラムの浸透にともない、宗教共同体ともいふべき社会が形成されてゆく。その社会の実態は「村の村長とともに重要な指導的な役割の担い手は、村の回教役人としてのグル（Guru）である。グルは回数の宗教的ヒエラルキーにおいては最も低い地位にあり、かれのうえには、慣習共同体レベルの回教指導者としてイマン（Iman）があり、領域の自治領の最高位の回教指導者としてのカリ（Kali）がいる。グルは村内の冠婚葬祭についての指導者であった。⁽²⁾」という。

ところが、二〇世紀になると、南スラウエシにもイスラム改革運動の波が押し寄せてくる。イスラム純化運動の団体ムハマディヤがそれである。一九一二年、アフマド・ドゥダフランによって中部ジャワの古都ジョクジャカルタに設立されたムハマディヤは、二〇年代の半ばより外領に支部を広げてゆく。ムハマディヤ運動が急速な展開をみせるのは単なるイスラムの浄化をめざす宗教運動にとどまらず、ムハマディヤ学校の設立や孤児院・病院の経営にいたる教育・社会運動に力を入れたことが主な原因となっている。この点は、南スラウエシでも例外ではない。

筆者は、ムハマディヤ運動の史的解明を主たる研究テーマとしているが、本稿ではその先進地南スラウエシを取り上げ、ムハマディヤの初期運動史を考察する。

一九二六年にムハマディヤ・マカッサル支部が成立し、三二年、ムハマディヤの全国大会がマカッサルで開催される。二六―三二年の六年間が、初期活動の最も充実した時期である。この六年間に焦点を絞り、支部の成立とその下部組織の広がりについて、若干の考察を加えてみたい。

一、南スラウェシのイスラム化

インドネシアの歴史をひも解く場合、その基本的史料となるものは、王国年代記である。イスラム到来以前、南スラウェシにはいくつかの王国が割拠した。その中で有力なのは、ゴワ、ボネ、ワジョの各王国であった。勇猛果敢なブギス・マカッサル人は海洋交易に従事していたが、もともとイスラム自体、仲継貿易都市メッカに興った都市の宗教であるし、初期信者の大半はアラブ商人であったので、商人によってもたらされたイスラムに対しては、さほどの抵抗感はなかったものと推測される。

さて、ノールダインの『マカッサルのイスラム化』⁽³⁾は小冊子ながら、イスラム化に関する学説と研究史を要領よくまとめている。特にイスラムが南スラウェシにいつ頃伝来したかの年代比定について、それぞれの王国の年代記によりながら、先学の説を検討し、独自の解釈を加えている。ノールダインの研究に依拠しながら、より深く掘り下げてイスラム化の問題を究明したのは、新進気鋭のインドネシア人イスラム史研究家マトゥラダである。彼の論文「南スラウェシのイスラム」はすでに邦訳されており、その理解が容易となっている。この論文で強調されていることは、いくつかの王国（勢力）に分裂していたブギス・マカッサルの社会が、イスラムが入って来ることにより、イスラムが統合の理念となり、統一されていったことである。⁽⁴⁾ことにそれは、イスラム化とそれに続くオランダ東インド会社の侵略の過程で、イスラムがブギス・マカッサル人の宗教イデオロギーとして定着し、結局は征服されるけれども、反オランダ闘争を戦ってゆくこととなったということである。

さらにもう一つ、忘れてならないのは、レオナルド・アンダヤの労作『アル・パラカの遺産——一七世紀南スラウェシ（セレベス）の歴史』⁽⁶⁾である。ゴワ国王であったアル・パラカの治績について、植民地文書（Koloniaal Archief）を随所に使用しながらゴワ王国の歴史そのものにも肉薄している。イスラム化の問題とオランダ東インド会社との関

係を調べる上で、格好の書である。ところがインドネシアで使われている小学生用の歴史教科書では、「オランダはボネのさきの王アルパラカと同盟を結んだ。アルパラカは以前ハサヌッディンによってその国から追放され、おのずとマカッサルに対し恨みをいだいていた。一六六六年に東インド会社はアルパラカの助勢を得て再び攻撃を仕掛けた。オランダは海から封鎖した。一六六八年にマカッサルは陥落してボンガヤ条約に強制的に調印させられた。」とある。アルパラカは売国奴に等しき扱いを受けている。ハサヌッディン王が、現在インドネシアの国家英雄とされているのは好対照といえる。では真相はどうなのであろうか。現代インドネシア歴史学界の大御所サルトノカルトディルジョやヌグロホルトスサント（故人）等が編纂したインドネシア史の決定版とされている『インドシア国史』⁽⁸⁾全六巻をみると、次の様な記述となっている。「戦争が勃発した。東インド会社の艦隊はボンタインに向けて出帆し、その地に上陸するや、部隊はブギス人のアルパラカの首府になだれこんだ。そこでは激しい戦闘が行なわれ、アルパラカは負傷した。ゴワの地は最上の軍糧倉庫とされた。」とある。オランダの侵略軍と戦って負傷したのであるから、国賊呼ばわりされるのは本人も本意であらうし、小学校では売国奴として教え込まれているのであるから大問題であるが、ここではその事実関係を究明する余裕がないので、将来の課題としたい。

ともあれ、南スラウエシに一七世紀初めイスラムが伝来し、ブギスマカッサル人は何ら抵抗なくイスラムに改宗することによって、イスラムがこの地の文化統合を果たしたために、強固なイスラム社会が形成されたことは確かかなようである。もちろん、異教徒であるオランダ人の侵略と植民地支配が、ブギスマカッサル人のイスラム教徒としての連帯意識をより強くしたことも事実であらう。

二、マカッサル支部設立

南スラウエシの初期ムハマディヤ運動に関する研究は、前述のマトッラダの論文に詳しい。そもそも西アジアとエジプトで始まったイスラム改革運動の洗礼を受けるのは、インドネシアではスマトラが最初であり、それはカウム・ムダ (Kaum Muda 若い世代) 運動⁽¹⁰⁾と呼ばれ、ミナンカバウ (西スマトラ) で盛んとなり、やがてそれはパドリ戦争⁽¹¹⁾でピークを迎える。ジャワでは、ムハマディヤの設立によって結実を見る。一九一二年に創立されたムハマディヤは二〇年代になってジャワ島外に活動の輪を広げてゆくが、外領支部第一号は西スマトラに誕生した。⁽¹²⁾一九二五年)すでにカウム・ムダ運動の伝統を有するスマトラでは当然と思えるが、その翌年にはマカッサル支部の成立をみる。マカッサル支部成立前後の事情もマトッラダ論文によってある程度裏付けられるが、これで十分だとはいえない。

より細かい究明は次稿にゆずるとして、ここでは若干の補足をしてみたい。ムハマディヤ・マカッサル支部設立に最大の貢献をした人物は、キアイールハジールアブドゥルラ (K.H. Abdullah) である。アブドゥルラはラブアン・マロス村で生まれ、成人後メッカに行き、アラブの地で約一〇年にわたりイスラムの学問について勉強した後、郷里南スラウエシに戻ってウラマ (法学者・イスラム教師) となる。彼は修学中にワッハブ派の復古的改革運動の影響を受け、イスラム改革運動を南スラウエシで実践する。アブドゥルラの行ったイスラムの改革 (浄化) とは何であろうか。二つの道がある。一つは非イスラム的なもの、そしていまひとつはイスラムの異端的要素の除去、前者はたとえばタルキン (Talkin)、これは葬式の時、墓の上で死者の魂を呼びさますため、イスラムの導師がアラビア語で行なう儀式であるが、ヒンドゥー教からきている。後者の例としてはイスラム神秘主義スーフイズム (Sufism) の中にみられる聖墓崇拜。そのほか、金曜礼拝のあとの正午の祈りや Taruh (仮面をつけた?) 二〇回の祈り等を禁止した。⁽¹⁴⁾ 加えて、諸々のアダット (Adat 慣習) がイスラムの教えに適合するかどうかという問題もあった。このような改革に対し、伝統

(保守)的なウラマたちからの反発は当然予測されるが、民族主義者の反感はやや以外であるが、彼らはムハマディアの会員が社会を不安に陥れると主張する。しかしながら、様々な障害物にもかかわらず、アブドゥルラは協力者にもめぐまれて、マカッサル支部の設立にこぎつける。設立に先立つ一九二一年、アブドゥルラは宗教団体アシラタル・ムスタキム(Assiratal Mustakim)を作っており、この組織がマカッサル支部の母体となっている。

一九二六年、ムハマディア・マカッサル支部が設立された。支部成立後の状況について、ムハマディアの機関誌『スアラ・ムハマディア Soeara Muhammadiyah (ムハマディアの声)』によりみてみたい。

マカッサル支部の発足式は一九二六年七月二七日、セン・キー映画館で行なわれた。最初五〇〇人程が出席していたが、次第にふえて、最終的には二、〇〇〇人前後にふくれ上った。来賓として出席したのは、オランダ地方政庁の代表、アル・イルシャド・スラバヤ(Al-Irshad Soerabaya)、アル・ハク(Al-haq)、アシラタル・ムスタキム、イスラム同盟、バジ・ミンサ(Badi Minsa)、キラーファト(Chilafat)、準委員会、プルス(Pers)等のイスラム改革団体の代表たちであった。イスラム系の雑誌として、スアラ・プルラミアン(Soeara Perlamian)、スアラ・イスラム・リナ(Rina)、アルプナ(Alpena)の編集者たちも出席していた。当時、イスラム団体やイスラム系の雑誌は、インドネシアの方々に雨後のタケノコのごとく生まれていた。この中で、アシラタル・ムスタキムはマカッサル支部の原細胞であったが、ムハマディア支部の成立とともに発展的解消を遂げなかったことは注目に値する。

来賓中最大の人物は、ジョクジャカルタのムハマディア中央本部書記のユヌス・アニス(T.M. Joenes Anis)であった。

中央本部代表としてあいさつに立ったユヌスは、信仰告白、礼拝、喜捨巡礼といったムスリムの義務について説明した後、聴衆に向かって「現在、敬虔なムスリムといえる人は多くいるでしょうか。」と問いかけた。さらに続けて彼は、「ムスリ

ムでありながらも、ムスリムとしての行為がイスラム教の教義に反している人が多い。それ故ムハマディヤはムスリムの悪行を正し、コーランとハディース（伝承）に基づき、イスラムを真のイスラムたらしめるために設立されたのです。ムハマディヤはムスリムに対してイスラムの正しい教えを教授し、よりよき教育を行うとともに、宗教の正しい意味を教えることを目的としています。」と熱っぽく訴えた。ユヌスの言葉の中には、ムハマディヤの精神が凝縮されているといえよう。来賓のあいさつに続き、支部組織の陣容は次のように決められた。議長ハジユスフダエン
＝マッティロ(H.Joosef daeng Mattiro) 副議長ハジ＝アブドゥルラ、第一書記ハジ＝ヌルッディン(H.Noeruddin) 第二書記ダエン＝マンジヤ(Daeng Mandja) 会計ハジ＝ヤヒヤ(H.Jahia) 監事ハジ＝ムハマド＝サレ(H. Moehamad Saleh) ムハマド＝ウスマン(M.Oesman) ダエン＝ミンゲ(Daeng Minggoe) ムハマド＝アブドゥルラフマン(M.Abbuachman) 顧問マンズール＝ヤマニ(S.Mansoer Jamani)。マンズール＝ヤマニはアラビア人で、この先アブドゥルラとともに支部活動の梶とりをつとめるようになる。

ところで、統計がやや古いけれども、一九〇五年のマカッサル市の人口をみると、総人口二六、〇〇〇人で、そのうちヨーロッパ(オランダ)人一、〇〇〇人、中国人四、六〇〇人、その他の外国人二〇〇人であり、一九一六年にはその五〇パーセント増となったとある。それから概算すると一九二六年当時、五万人くらいではなかったかと思われる。マカッサル市は南スラウェシの中心都市としてだけではなく、貿易港としても繁栄していた。その一つの証拠は、人口中に占める中国人の多さである。マカッサルは、いわば商人の町とみなすこともできよう。現在でもそうではあるが、ムハマディヤは都市のインテリ・ムスリムや商人層をその主な支持基盤としている。そのような意味からいっても、マカッサルはムハマディヤが活動の場を見出すことのできる典型的な町であったといえる。このことは、支部発足式に集まった人の数からも推測がつく。加えて、支部役員の顔ぶれをみても、副議長のアブドゥルラは一〇年

もアラブの地で遊学しているのでかなり裕福な家の出であると思われるし、ヤマニはアラブ人バティック商人、リダー達は経済的余裕のある開明的ウラマ層と規定できよう。

三、支部活動

マカッサル支部書記長スワルディは、「活動を続けるムハマディヤ・マカッサル」と題し、『スアラ・ムハマディヤ』に一文を寄せている。

ムハマディヤ・マカッサル支部が設立され、中央本部代表のユヌス・アニス氏が本部に帰られた後、我々はユヌス氏が毎木曜の夜ユリアナカデのムハマディヤ事務所で、毎金曜の夜ルンガン区四丁目のムハマディヤ会員ガリゴダエン・マバテさんの自宅で行っていたイスラムの宣教を、今度は副議長キアイ・ハジ・アブドゥルラの主導の下、ずっと続けている。そして毎回、多くの男女が聞きにつめかけている。女性の側は仕切りを設けているが、おそらく聞き手たちはイスラムについてのより広い認識を得ることができるので、喜んで耳を傾けているのであろう。マカッサルのムハマディヤが他の地域に遅れをとることなく、なお一層発展しますように神の御加護のあらんことを。

アミンノ

ムハマディヤ・マカッサル支部を代表して

書記長スワルディ

これに対し、その文章の下に中央本部が若干のコメントを載せている。

ムハマディヤ・マカッサル支部の発展ぶりをつぶさに観察し、我々はわが団体がセレベスとその周辺で満足す

べき状態にあるということを確信するにいたった。ムハマディヤ・マカッサルに神の御慈悲を。²¹⁾

マカッサル支部の順調なすべり出しがうかがわれる。ただ、スワルディの文の中で述べられている男女の間仕切りであるが、このことで思い出すのはスカルノのエピソードである。一九三九年、スカルノ夫妻はムハマディヤの集会に出席しようとし、会場にかけられている男女の間仕切り用のカーテンを見て非常な不快感を覚え、そのまま立ち去るという出来事があった。²²⁾このことはイスラム改革派の後進性を示す事柄として引き合いに出されるけれども、イスラム改革運動がもたらされる以前、宗教上の集会には男のみが参加を許されていたことを考えれば、やはり進歩といえまいか。こうした仕切りが取り払われるのはインドネシアが独立を達成した後のことで、ムハマディヤについては、ムハマディヤ学校の成功とそこでの男女共学の実践が大きく寄与しているものと考えられる。

次にマカッサル市外へのムハマディヤ運動の広がりについて目を転じてみよう。マカッサル支部は設立の翌年、すなわち一九二七年プカロンガンで開かれた第一六回ムハマディヤ大会に二名の代表を送り、²³⁾その翌年の一七回ソロ大会には三名を派遣した。²⁴⁾さらに次年度二九年にジョクジャカルタで開催された一八回大会には、一挙に八名と増えた。ちなみに、この大会にはジャワ島外から四九、ジャワ島内より一九〇、合わせて二三九名の代表が出席している。²⁵⁾もちろんこれは各地の正式代表であるから、一般会員を含めた大会参加者はこの数をはるかに上回る。大会出席者の数はムハマディヤ運動の拡大(浸透)度をはかるバロメーターであるが、翌年一九回はブキティンギ(スマトラ)、二一回(三二年)はいよいよマカッサルで開かれることとなるので、一八回ジョクジャカルタ大会は大会史の上でも重要な年に位置づけられよう。それはともかくとして、一八回大会にマカッサルより八名と書いたが、正確には南スラウェシより八名であった。マカッサル支部とは別に五つのグループ(準支部組織)が代表を送っていた。その内訳はグループ・ラバッカ(Gr. Labakkang)、ブワワ(Gr. Belawa)(以上マカッサル市内)、パンカジェネ(Gr. Pangkadjene)、

シンカン(Gr. Sengkang)、バンタエン(Gr. Bontain)であった。中央本部が認める地方組織は支部(Tjombang)までとなっていた。マトゥラダの論文ではシンカンに支部が設立されたのは一九二八年七月とあるが、これは誤りである。『スアラ・ムハディヤ』をみると、一九二九年一月、三〇年九月発行のものにはまだグループとしてのっている。ところが一九三二年六月号では支部として記載されているので、以上のことから類推し、シンカン支部の成立は一九三一年とするのが妥当ではあるまいか。ところで支部の下の組織をグループと訳したが、略字のGrはgroepの略ではなく、gerombolan(団体、なかも、グループの意)の略である。

四、マカッサル市外の活動状況

シンカンの状況についてはマトゥラダ論文に詳しいので、ここではバンタエンについてみることにする。マカッサル支部の活動は、マカッサル市内で細胞分裂するともに、市外へも枝分かれしてゆく。バンタエンは南スラウエシでも最南端の海に面した所である。『スアラ・ムハディヤ』によると、バンタエンにムハマディヤのグループが誕生したのは一九二七年のこと、七月二五・二六日の両日に行なわれたグループの発足式にはマカッサル支部を代表してハジッサブドゥルラ、マンスールアルヤマニが出席するとともに、東部ジャワのプルボリンゴ(Poerbolingo)支部代表ハジツワウイ(H.A. Zwawie)も列席している。この時、来賓として招かれたアブドゥルラは、ムラユ(現インドネシア)語とブギス語の両方であいつしている。グループ・バンタエンの役員は次のように決った。

この時のムハマディヤ会員数は三五名で、活動としては小さなイスラム学校(madrasah)を経営しており、活動が順調にゆけば、支部昇格も間違いと書かれている。

副議長にはH・I・S・(Hollandsch Inlansch School)の教官が就任しており、マドラサも経営していることか

グループ・バンタエンの役員

史
学
論
叢

1. Hadji Nakka	Voorzitter (議長)
2. Salamon, onderwijzer H.I.S. (オランダ・インドネシア人学校教官)	Vice " (副議長)
3. Ambo dg. Mangawing	1e Secretaris (第1書記)
4. Sammang	2e " (第2 ")
5. Osman	Penningmeester (会計)
6. Abdul Rahim	} Commissarissen (理事)
7. Moehd. Sand	
8. Toelo	
9. Moehd. Zainoeddin	

(出所: Soeara Moehammadijah, 1927, P. 77.)

ら、このグループは学校教育に力を入れていることがわかる。現在のバンタエンは三つの郡と一二の村からなる人口八万五千ほどの小規模な県 (Kabupaten) であるから、一九二七年にムハマディアのグループが誕生し、活動を始めていたという事実に対してある種の驚きを禁じ得ない。このことは、南スラウエシのハマディア運動の広がりとは力強さを物語るとともに、その中心マカッサル支部のリーダーシップとエネルギーを示しているのではなからうか。ブギス・マカッサル社会というまとまりの中で、一つの核が生じれば、核分裂を起して子細胞がどんどん広がってゆく。マカッサル市外にムハマディアの小さな芽が生じれば、支部の幹部がその地にひんばんに出かけてゆき、いかなる援助も惜しまない。こうしてグループ・バンタエンは誕生したのである。

おわりに

極めて大雑把ではあるが、マカッサル支部設立前後の事情について検証してみた。支部成立は南スラウエシにおけるイスラム改革運動の出発点となったが、設立以後の活動の総決算ともいふべき行事を主催する。それは、第二一回ムハマディア・マカッサル大会(一九三三年)

の開催である。ムハマディヤ大会の歴史については、すでに別稿⁽²⁾でふれているので多言しないけれども、一九一二年にムハマディヤが設立されて以後、二五年まで毎年ジョクジャカルタで開かれており、二六年スラバヤ、二七年パカロンガン、二八年ソロ、二九年再びジョクジャで開かれる。ジャワ島外で開催されるのは三〇年のブキティンギ(西スマトラ)が初めてであり、ムハマディヤの歴史にとっても画期的なこととなった。この運動がジャワ外に広がる第一歩として記念すべき大会である。ブキティンギの翌年はジョクジャに戻ったが、三二年、いよいよマカッサルで開催されることになった。

一九二六年にマカッサル支部が設立されて以来、六年目にして全国大会を開くまでになっている。これはひとえにマカッサル支部が蓄えた実力の証しであるとともに、南スラウエシのイスラム改革運動が確固たる基盤を打ち立てた証明でもあろう。この大会では、すでに中央本部よりコンスル(全権代理)・マカッサルに任命されていたハジ・アブドゥルラが実行委員長となり、マカッサル支部だけでなく、南スラウエシのムハマディヤ会員の総力を結集して大会を主催する。大会の成功により、マカッサル支部はその存在をインドネシア全域に強く印象づける。そして、イスラム改革運動の波は北スラウエシの方へも及んでゆくことになる。大会の経過および内容、決議事項等については紙幅の関係もあり、次稿に譲りたい。

尚、筆者は一九八三年と八五年の二回、ウジュンパンダン(旧マカッサル)市を訪れ、ムハマディヤの経営する学校や病院、孤児院等を見学し、ムハマディヤ運動の実態と現状を調査する機会を持った。その折、ムハマディヤの強い地域でアンケートやヒヤリングによるフィールド・ワークにも従事した。詳しい調査結果については、近々発表する予定である。一九二六年に出発した南スラウエシのイスラム改革運動は現在まで連綿として続いており、衰えるどころか、さらに一層の深まりと広がりをみせているような印象を受けた。

(注)

- (1) クンチャラニングラット編 加藤剛・土屋健治・白石隆訳『インドネシアの諸民族と文化』株式会社めこん 一九八〇年 三二九頁。
- (2) 岸幸一「南スラウェシの社会」岸幸一・馬淵東一編者『インドネシアの社会構造』所収 アジア経済研究所 一九六九年 三七一頁。
- (3) J. NOORDUYN, translated by S. GUNAWAN, ISLMISASI MAKASSAR, BIRATARA, DJAKARTA, 1972.
- (4) タウフィック・アブドゥルラ編白石ちや・白石隆訳『インドネシアのイスラム』株式会社めこん 一九八五年。
- (5) 同右書 一一六―一一七頁。
- (6) LEONARD Y. ANDAYA, THE HERITAGE OF ARUNG PALAKKA: A HISTORY OF SOUTH SULAWESI (CELEBES) IN THE SEVENTEENTH CENTURY, THE HAGUE-MARTINUS NIJHOFF, 1981.
- (7) 全訳世界の歴史教科書シリーズ三二『インドネシア―その人々の歴史―』帝国書院 昭和五八年 七一頁
- (8) Sartono Kartodirdjo, Marwati Djoened Poesponegoro, SEJARAH NASIONAL INDONESIA III, BALAI PUSTAKA, Jakarta, 1977.
- (9) Ibid, P. 376.
- (10) この運動は主として教育改革や政治運動を志した。その代表は Sumatera Thawalib であった。
- (11) MUHAMMAD RAJDJAB, PERANG PADERI, P. N. BALAI PUSTAKA, Djakarta, 1964 を参照されたい。
- (12) スンガイ・バタン (Sungai Batang) 支部がその最初であった。(Dr. HAMKA, MUHAMMADIYAH di MINANGKABAU, Yayasan Nurul Islam, Jakarta, 1974, P. 36.)

南スラウエシ(セレベス)のイスラム改革運動研究(その1)

六〇

- 03 タウフイック・アブドゥルラ編 前掲書 一三九頁。
- 04 Taufik Abdullah, ed., *Agama dan Perubahan Sosial*, CV. Rajawali, Jakarta, 1983, pp. 386-387.
- 05 Ibid., P. 387.
- 06 Ibid., 386.
- 07 SOEARA MOEHAMMADJAH. 1926. P. 46.
- 08 Ibid., pp. 46-47.
- 09 ALMANAK MOEHAMMADJAH, 1927, P. 163.
- 00 ENCYCLOPAEDIE VAN NEDERLANDSCH-INDIË, TWEDE DEEL. H. M. E. J. BRILL, LEIDEN, 1918, P. 645.
- 01 SOEARA MOEHAMMADJAH, 1926. P. 144.
- 02 土屋健治 「スカルノとイスラム(一九三四年〜一九四二年)」『東南アジア研究』九巻四号 一九七二年 五八三頁。
- 03 SOEARA 'AISJIAH, 1927, P. 3.
- 04 SOEARA 'AISJIAH, 1928, P. 18.
- 05 PERINGATAN CONGRES MOEHAMMADJAH KE 18, 1929, P. 13.
- 06 タウフイック・アブドゥルラ編 前掲書 一四二頁。
- 07 SOEARA MOEHAMMADJAH, 1929, P. 253.
- 08 SOEARA MOEHAMMADJAH, 1930, P. 389.
- 09 SOEARA MOEHAMMADJAH, 1932, P. 11.
- 00 SOEARA MOEHAMMADJAH, 1927, P. 77.

① クンチャラニングラット編 前掲書三一―九頁。

② 拙稿 「パンチャ・シラ（五原則）とムハマディヤー大会―第四一回ムハマディヤー大会に出席して―」 『史学研究』
一七四号（一九八七年三月二〇日）。

付記

本稿は昭和六〇年度文部省科学研究費海外学術調査「インドネシア宗教社会の史的実地調査」（責任者今永清二 広島大学教授）の成果報告の一部を成すものである。執筆にあたり、今永教授の御指導を受けた。記して感謝の意を表したい。